野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第４集

１９７７

津山市教育委員会

道路改良工事新錦橋押入線
文化財発掘調査委員会

野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第４集

１９７７

津山市教育委員会

道路改良工事新錦橋押入線
文化財発掘調査委員会

例　　言

1. 本書は道路改良工事新錦橋押入線文化財発掘調査委員会が同工事に先立って実施した野介代地京遺跡発掘調査の報告書である。
1. 調査は津山市から委託を受け，昭和51年８月から翌年２月まで実施した。
1. 本書に使用した方位は磁北である。また，高さは海抜高である。
1. 本書の作成は，湊　哲夫が担当した。

目　　次

Ⅰ　位置と歴史的環境 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 3

1. 調査に至る経過 …… 3
2. 調査組織 …… 4
3. 調査経過 …… 5
4. 調査日誌 …… 6

Ⅲ　遺構・遺物 …… 8

1. 竪穴住居址 …… 8
2. 建物址 …… 8
3. 溝状遺構 …… 9
4. その他の遺構 …… 10
5. 遺物 …… 10

Ⅳ　結語 …… 12

図 版 目 次

PL. 1　周辺主要遺跡分布（国土地理院発行地形図）
2　遺構配置実測図
3　竪穴住居址（ＳＢ１）実測図
4　建物址（ＳＢ２）実測図
5　溝状遺構実測図
6　遺跡遠景写真（1. Ａ区・Ｂ区　2. Ｄ区）
7　竪穴住居址（ＳＢ１）写真（1. 東南から　2. 北から　3. 断面Ｂ－Ｂ′）
8　建物址（ＳＢ２）写真
9　溝状遺構写真（1. ＳＤ１～４，ＳＤ７・８，2. ＳＤ２・３）
10　溝状遺構写真（1. ＳＤ４～６断面Ｈ－Ｈ′，2. ＳＤ１断面Ｂ－Ｂ′，3. ＳＤ２断面Ｅ－Ｅ′）
11　遺物（1. 高杯形土器，2. 銅銭，3. 扁平片刃石斧，4. 鉄滓，5. Ｄ区出土陶磁器）

挿 図 目 次

Fig. 1　遺跡の位置 …… 1
2　遺跡周辺の地形 …… 2
3　溝状遺構土層断面 …… 9
4　ＳＢ１出土弥生土器 …… 10
5　Ｂ区出土扁平片刃石斧 …… 11

I　位置と歴史的環境

中国地方は，南に瀬戸内海，北に日本海に挟まれ，そのやや北よりには，概ね標高 1,000 m 前後の中国山地が東西に長く横たわっている。この中国山地から南北に大小の河川が流れ，それぞれの海に注ぐ。これらの河川流域には，小沖積平地が発達し，水稲耕作の安定した生産基盤を提供している。中国地方の東端に位置し，標高 735 mの人形峠付近に源を発し，津山盆地に流れ込む水を集めながら，瀬戸内海に注ぐ河川が吉井川である。野介代地京遺跡は，この吉井川と阿波村から流れきたった加茂川が合流する地点の北約 2.5 kmにある。(Fig. 1)。 遺跡の位置する加茂川と吉井川の一支流宮川との間に挟まれた地域は，中国山地南麓から派生する標高 120 mから 220 m程の南北に細長く延びる低丘陵とそれらの丘陵間の狭長な谷とから構成されている。それらの一つに，津山市大篠樋ノ内池付近に始まり，津山市籾保(もみほ)，野介代を通って，吉井川と宮川との合流部にむかって長靴状に延びる丘陵がある（PL. 1）。このうち，津山市志戸部(しとべ)と野介代の字堺にあり，地京池西の標高 135 ～ 140 mの丘陵上に位置するのが本遺跡である（Fig. 2）。その行政区画は，岡山県津山市野介代 125 番地他である。

吉井川と加茂川との合流点周辺の地域には，弥生時代以来，人々の継続的な足跡が刻まれている。弥生前期の山北一丁田遺跡(いっちょうでん)[1]（PL. 1－2），中期集落遺跡としての沼弥生住居址群[2]（PL.

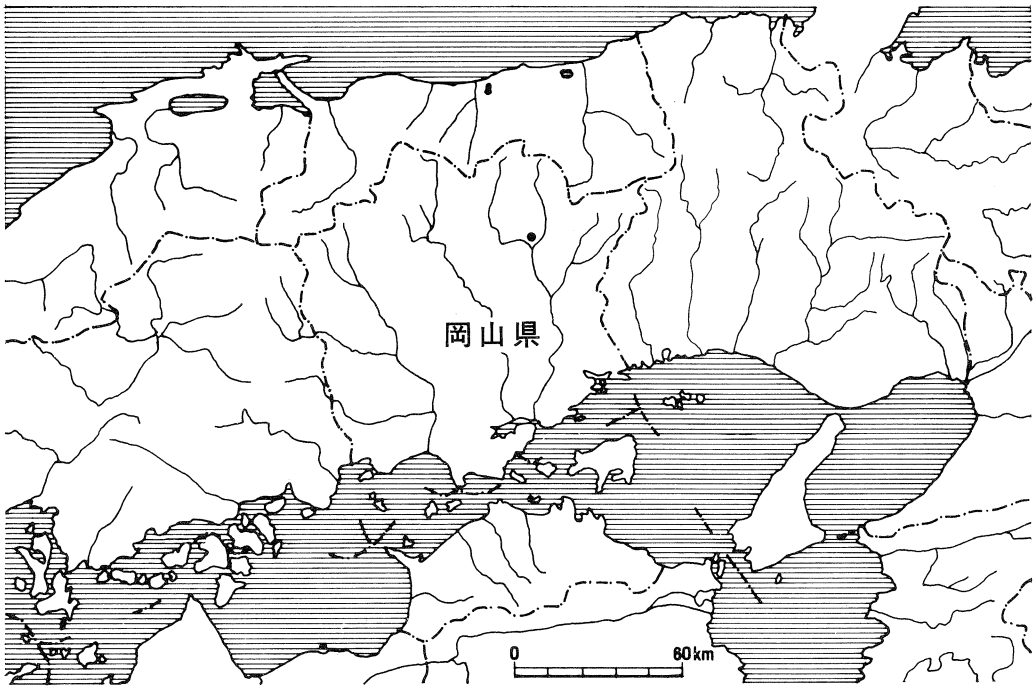


Fig. I　遺跡の位置

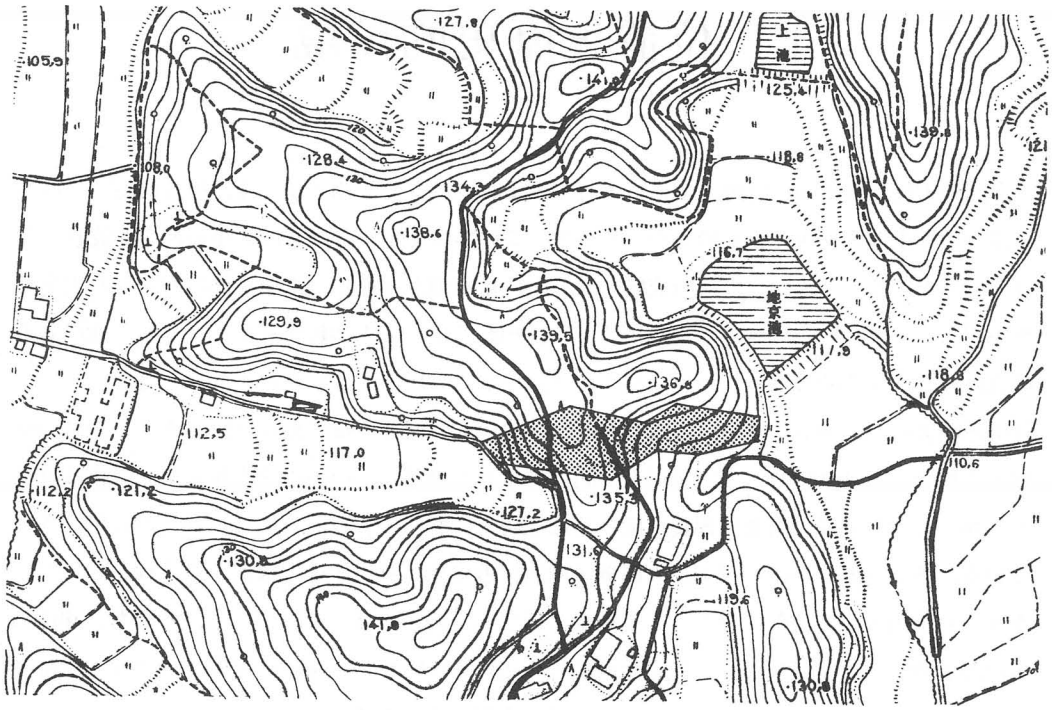


Fig.2　遺跡周辺の地形（S＝1:4,500）

1－3）・押入西遺跡[3]（PL.1－5）・紫保井遺跡（PL.1－7）などが知られ，後期には，総社内山遺跡（PL. 1−8）・沼京免遺跡（PL. 1−12）・大田十二社遺跡（PL. 1−13）などの集落遺跡とともに，下道山遺跡[4]（PL. 1−9）・権現山遺跡（PL. 1−10）・上原遺跡（PL. 1−11）などの埋葬遺跡が調査されている。古墳時代も濃密な遺跡分布のあり方を示している。すなわち，前期古墳として日上天王山古墳（PL. 1−15）・正仙塚古墳（PL. 1−16）・井口車塚古墳（PL. 1−18）・国分寺飯塚古墳（PL. 1−17）などがあり，後期には玉琳大塚古墳（PL. 1−25）・大野木塚古墳（PL. 1−26）などの首長墳とともに，川崎六ツ塚古墳群（PL. 1−24）などの群集墳が数多く形成される。律令時代には，美作国府[5]（PL. 1−27)が宮川左岸の段丘上に置かれ，吉井川と加茂川との合流点東南東の台地には，美作国分寺（PL. 1−28）と国分尼寺（PL. 1−29）が相ついで造営された。

註

(1) 植月壮介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」（近藤義郎・渋谷泰彦編著『津山弥生住居址群の研究—西地区—』1957, 所収）

(2) 近藤義郎・渋谷泰彦前掲書

(3) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973）

(4) 岡山県教育委員会『下道山遺跡緊急発掘調査概報』1977）

(5) 岡山県教育委員会「美作国府」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』1973, 所収）

II 調査の経過

1. 調査に至る経過

昭和49年７月，津山市建設部から市教育委員会に新錦橋～押入線道路新設改良工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。これを受けて，市教委は同年12月と翌年２月に同路線の分布調査を行ない，次のような調査結果を得た。

(1)，野介代尾鼻工区の南西に周知の遺跡である野介代尾鼻遺跡があるが，当工区もそれと同一の丘陵上にあるので，遺跡の範囲に含まれる可能性が濃いこと。

(2)，野介代三反田遺跡は，遺跡地図に記載されているものの，すでに美作台地開発事業による造成が完了しており，遺跡は消滅していること。

(3)，高野地区条里遺跡は，保存状況確認のための調査を必要とすること。

(4)，周知の遺跡以外で野介代地京地区，高野山西地区については，地形，周囲の遺跡の分布状況等から推して，遺跡の存在する可能性が濃いこと。

以上の確認に基づき，昭和50年７月に市教委は市建設部に野介代地京地区，野介代尾鼻地区，高野山西地区，高野条里地区について，埋蔵文化財確認調査を実施する必要がある旨回答した。そして，上記のうち工期の遅れる高野条里地区を除く３地区について，市建設部からの事務委託を受けて市教委が埋蔵文化財確認調査を実施した。

確認調査は，昭和50年12月３日から翌年１月17日まで実施された。発掘総面積は 1,411 ㎡である。発掘は丘陵尾根と平行ないし直交するような幅約２ｍのトレンチを設けて行なった。以下，市教委による確認調査の各地区毎の概要を記す。

野介代地京地区　調査期間12月３日～12月12日。発掘面積 544 ㎡。中央の浅い谷の西側丘陵頂部から東斜面にかけて，幅 0.4 ～ 2.8 ｍの大小の溝状遺構６箇所を検出した。これらの遺構は，検出のみにとどめ，その発掘はさけた。出土遺物は表土層からの扁平片刃石斧１個と鉄滓２個のみであった。石斧の出土から推して，これらの遺構は主として弥生時代中期に属するのではないかと考えられた。また，谷の東側丘陵斜面には幅約13ｍの平担面があり，そこに東西に一列に並ぶ５箇所の柱穴を検出した。これらは建物址の一部と推定されたが，やはり検出のみにとどめた。柱穴付近の表土層から備前焼など若干の土器片が出土した。

野介代尾鼻地区　調査期間12月12日～１月15日。発掘面積 717 ㎡。本地区は地京地区の東約 600 ｍで，谷を隔てた対岸にある。丘陵頂部とその東西の斜面からなるが，東斜面が急であるのに対し，西斜面は緩やかである。遺構は丘頂には存在せず，東西斜面に検出されたが，と

くに西斜面に集中した。すなわち，西斜面で土壙墓10数基，性格不明の土壙３箇所，柱穴４箇所，その他１箇所が検出された。土壙墓は２基を発掘した。どちらも，径1.2ｍ，深さ1.2ｍで，中から硯，キセル，毛抜，鉄釘などが出土した。時期は江戸時代と思われる。東斜面では径1.0ｍ，深さ1.0ｍ程の円形プランの土壙墓２基を検出した。遺物は存在しなかったが，形態は西斜面のそれと同様である。その他，遺構に伴なわずに皿，茶碗，擂鉢等陶磁器が出土した。このように，尾鼻地区には遺構がかなり密に検出されたものの，これらは概ね江戸時代頃のものと認められた。

高野山西地区　調査期間１月15日～１月17日。発掘面積150㎡。本地区は正仙塚古墳の南約400ｍの丘陵上にある。調査の結果，遺構・遺物は認められなかった。

以上の確認調査結果に基づき，昭和51年３月，市教委は市建設部に埋蔵文化財の取扱いについて次のような要請を行なった。

(1)，野介代地京遺跡は，溝状遺構・建物址などを含む弥生時代中期を中心とする遺構が存在するので，現状変更が必要な場合は，発掘調査を行なう必要があること。

(2)，高野地区条里遺跡については，今回確認調査を行なっていないので，工事に際しては，遺存状況確認のための調査を行なう必要があること。

そして，市教委と市建設部で協議された結果，高野地区条里遺構については，工期が遅れるので将来のこととし，野介代地京遺跡について，発掘調査による「記録保存」を行なうこととされたのである。

2. 調　査　組　織

岡山県教育委員会と津山市教育委員会の関係職員からなる道路改良工事新錦橋押入線文化財発掘調査委員会が主体となり，津山市から調査委託を受けて，発掘調査を実施した。委員会の構成は次のとおりである。

役　名	氏　　名	所　　属
委員長	森　川　正　利	津山市教育委員会教育次長
副委員長	西　口　秀　俊	岡山県教育庁文化課参事
同　　上	光　岡　釟　郎	津山市教育委員会社会教育課長
委　　員	光　吉　勝　彦	岡山県教育庁文化課文化財二係長
同　　上	須　江　尚　志	津山市教育委員会社会教育課文化係長
同　　上	葛　原　克　人	岡山県教育庁文化課文化財保護主査
同　　上	河　本　　清	津山市教育委員会社会教育課文化財保護主査

事　務　局

役　名	氏　　名	所　　属
事務局長	光　岡　釈　郎	津山市教育委員会社会教育課長
事務局次長	須　江　尚　志	同　　社会教育課文化係長
事務局員	湊　　哲　夫	同　　主　事
同　上	杉　畑　　操	同　　事務員

監　　事

役　名	氏　　名	所　　属
監　事	水　田　　稔	岡山県教育庁文化課主幹
同　上	谷　名　通　良	津山市教育委員会社会教育課長補佐

調　査　団

役　名	氏　　名	所　　属
調査団長	河　本　　清	津山市教育委員会社会教育課文化財保護主査
調 査 員	伊　藤　　晃	岡山県教育庁文化課文化財保護主事
同　上	栗　野　克　己	同　　上
同　上 (現場担当)	湊　　哲　夫	津山市教育委員会社会教育課主事

3. 調　査　経　過

調査対象地は，道路路線の関係上，南北15～35m，東西 165 mの細長い帯状を呈し，南北方向の丘陵を横断する形となっている。対象地の中央には，小さな谷が入り込んでおり，そこをC区とした。谷の西側の丘陵は，南北道路によって切断されているので，その道路の西側をA区，道路と谷との間をB区とした。さらに，谷の東側の丘陵をD区とした。D区はA・B区のある南北方向に延びる丘陵から東へ派生する丘陵の南斜面にあたる。発掘にあたっては，道路工事用の東西センターラインを基準として，調査区全域に10m単位の方眼を設定し，その南北軸をA～Oのアルファベット，東西軸を1～5の数字で表わした。また，個々の単位区は，西北隅の地点記号で表示した。C区はトレンチ調査にとどめ，他の地区はほぼ全面を発掘した。調査面積は2356m²である。発掘は排土の都合上，C区から行なった。

C区は 1.5 ～ 2 mの厚い堆積土で覆われた小さな谷で，そこに2箇所のトレンチを設けた。発掘面積24m²。遺構は検出されず，堆積土から備前焼・瓦質土器，鉄釘などの遺物が出土した。調査の結果，遺構は存在しないと判断されたので，これ以上の調査区の拡張をしなかった。次にD区の発掘に着手したが，道路工事の都合上，A・B区を急ぐよう要請されたので，A区の調査に移行した。A区は丘頂を中心に発掘したが，遺構・遺物は認められなかった。調査面積

205 ㎡。次にＢ区に移り，東斜面の裾部から丘頂にかけて遂次排土を行なった。調査面積 984 ㎡。Ｂ区では丘頂平担部に尾根と平行して大小の溝８条，東斜面肩部に竪穴住居址１棟を検出した。最後にＤ区の発掘を行なった。発掘面積 1,143 ㎡。Ｄ区中央には調査前から幅約13ｍの平担部が認められたが，発掘するとそこに高さ約 1,6 ｍの崖が現われた。遺構はこの平担面上に造られており，掘立柱建物址１棟などを検出した。先の崖は当初，建物を築く際の整地によるものと考えたが，最後に崖を断ち割ったところ，自然現像により形成されたことが判明した。

4. 調査日誌（昭和51年８月27日～昭和52年２月16日）

8・27～9・7　調査区の草刈り。

8・30～31　現場小屋設置。

9・2～7　業者に委託して地形測量を行なう。

9・7　Ｃ区にトレンチを設けて，発掘を開始する。

9・16　Ｃ区のトレンチの排土。トレンチから備前焼など出土。Ｄ－Ｍ３区の発掘に着手。Ｍ３区から寛永通宝１個出土。

9・17　Ｃ区のトレンチの排土。Ｍ３区の排土。工事の都合上Ａ・Ｂ区の発掘を急ぐこととなったので，Ｄ区をあとまわしにして，Ａ－Ｃ２区の排土を行なう。

9・21　Ｂ２区の排土。

9・24～27　Ｃ区トレンチの精査。Ｂ１・Ｂ２区の排土。

9・28　Ｃ区トレンチの実測。Ｂ１区の精査。Ｂ－Ｈ３区の発掘開始。

10・1　Ｃ区トレンチの写真撮影を行ない，Ｃ区の発掘終了。Ｂ１・Ｂ２・Ｃ２区の精査。Ａ区の写真撮影を行なって，Ａ区の発掘終了。Ｈ３・Ｇ２区の精査。Ｇ３区の排土。

10・5　Ｇ３・Ｇ４区の排土。

10・13　Ｆ２・Ｆ３・Ｅ２区の排土。Ｆ２区で溝状遺構検出。またこの区から弥生土器出土。

10・15　Ｆ２・Ｆ３区の精査を行ない，先の溝状遺構の検出に努める。その結果，それが竪穴住居址（ＳＢ１）と判明。Ｆ１・Ｆ４区の排土。

10・16　Ｆ１・Ｆ４区の排土。Ｆ３区の精査。

10・19　Ｆ１区の排土。

10・22　Ｆ４区の精査。Ｅ２区の排土。

11・9　ＳＢ１の発掘。Ｅ２区を精査し，溝状遺構ＳＤ１を検出。

11・26　ＳＢ１の土層断面実測。溝状遺構ＳＤ１・２の発掘，Ｄ－Ｍ２区の発掘開始。

11・29　ＳＤ１の発掘。遺物なし。Ｍ２区の排土。

12・3　ＳＤ１の土層断面の実測。

12・7　前日に続きＳＤ１土層断面の実測。あわせてその写真撮影を行なう。Ｍ２区の排土。

12・10　ＳＢ１の土層断面の補足実測。Ｎ３区の排土。

12・20　調査委員会開催。強風のため写真撮影用のタワーが倒れる。人身事故なく幸い。

12・21　ＳＤ１・４・５・６の実測。

12・26　ＳＢ１の断面実測を試みるが，谷から吹き上げる強風のため実測困難。

12・28　強風をおしてＳＢ１の実測を行なう。本日でＢ区の発掘終了。

1・8　Ｍ１・Ｍ２区の排土。Ａ・Ｂ区の造成工事開始。

1・10　Ｍ１・Ｍ２区の排土。

1・13　Ｍ１区の排土。Ｍ２・Ｍ３区の精査。Ｍ２区で柱穴３箇所を検出する。

1・14　Ｍ１区の排土。Ｍ２区からの崖はさらに北東に続く，Ｍ３区の精査。

1・15～18　Ｎ２区の排土を行ない，掘立柱建物ＳＢ２の全容を検出。ただちに柱穴の発掘。

1・19　Ｐ３区の排土。

1・20　Ｐ３・Ｏ２区の排土。崖の土層断面の検討。

1・22　崖土層断面の写真撮影。Ｐ３区の精査。Ｏ１・Ｏ２・Ｐ２区の排土。

2・2　Ｎ２区で新たに小柱穴２箇所検出。ＳＢ２の実測。Ｐ２・Ｌ２区の排土。

2・8　ＳＢ２の写真撮影。Ｋ１区の排土。

2・12　崖の断ち割り調査。この崖は自然に形成されたことが判明。発掘終了。

2・16　発掘器材・出土遺物などを作業小屋から徹収。

Ⅲ 遺 構・遺 物

1. 竪穴住居址（PL. 3・7）

竪穴住居址ＳＢ１は，Ｂ区の丘陵東肩部にある。ＳＢ１付近の層位は，厚さ約10㎝の黒褐色表土の下に厚さ約10㎝の黒褐色粗砂質土があり，さらに，その下に厚さ約15㎝の橙褐色粗砂質土がある。この橙褐色土の下が地山となっており，ＳＢ１はこの地山を切り込んで造られている。ＳＢ１検出面から床面までの深さは40～50㎝で，ＳＢ１埋土は，主として黒褐色細砂質土と黄褐色細砂質土とからなっている。

ＳＢ１のプランは，隅丸方形で東半分が削り取られている。現存する部分での南北長は5.0ｍである。壁はかなりの法を有するが，一部にオーバーハングしている箇所もある。現存する部分の隅付近の壁ぎわに周溝があるが，中央部にはない。周溝はＵ字溝で幅10～15㎝，床面からの深さ約５㎝を測る。柱穴は４箇所検出した。１は38㎝×27㎝の楕円形のピットで，床面からの深さ52㎝を測る。２は径30㎝の円形で，深さ57㎝。３は円形で，径23㎝，上部がかなり削り取られているが，床面からの深さを復元すると69㎝となる。４は円形で径25㎝，検出面からの深さ24㎝を測る。これらのうち，１・２が主柱と考えられ，それらに対応すべき東側の柱穴は削り取られているものと思われる。従って，ＳＢ１は４本柱の住居と推定されるのである。３は支柱であろう。４は住居址の東南隅に位置すると復元されるが，ＳＢ１に伴なうかどうかわからない。柱の間隔は，１と２が223㎝である。５はＳＢ１のほぼ中心にあると推定される中央穴である。円形で，上面が若干削り取られており床面からの深さを復元すると26㎝となる。ＳＢ１の西北隅の周溝外側に，床面より一段高いテラス状の施設がある。

ピット１の北の床面直上で，高杯形土器１個体が出土した。また，ピット４埋土からは２点の弥生土器細片が出土した。さらに，ＳＢ１埋土中から若干の弥生土器細片が出土した。これらの土器は，いずれも弥生時代中期後半の特徴をそなえており，ＳＢ１の時期もほぼその頃と考えられる。

2. 建 物 址（PL. 4・8）

丘陵南裾部のＤ区中央に，東北方向に続く高さ約1.6ｍの自然崖があり，その東南側が幅約13ｍにわたって平担面となっている。建物址ＳＢ２は，この平担面上にある。この付近の層位は，厚さ約20㎝の表土の下に厚さ約20㎝の暗褐色細砂質土があり，その下が地山となっている。ＳＢ２は，この地山面上で検出された。

ＳＢ２は桁行４間，梁間２間の掘立柱の東西棟建物である。すべての柱筋に柱をもつ。東西9.2ｍ，南北4.0ｍを測る。柱の並びは整然としない。柱穴は円形ないし楕円形で，径30～50㎝，深さ10～20㎝程度である。深さが非常に浅いのは，上部が削り取られているためと思われる。北側柱西第２柱穴，南側柱西第３柱穴，及び建物中心にある柱穴を除く12箇所の柱穴で柱痕を検出した。柱痕の直径は12～20㎝である。柱間は桁・梁両方向とも不揃いである。桁方向では，おおむね210㎝前後であるが，東第１柱筋と第２柱筋の間隔が260㎝前後とかなり広くなっている。梁方向では，北柱間が200～230㎝，南柱間が160～185㎝で，後者がかなり短い。建物の構造は判然としないが，梁方向の南柱間が短いので，あるいは１間×４間の身舎に南廂がつくものとも考えられる。

柱穴からの出土遺物はない。建物の時期も判然としない。

3. 溝状遺物（PL. 5・9・10, Fig. 3）

Ｂ区の丘陵頂部は，幅約15ｍにわたって平担面を呈しており，その部分に大小８条の溝状遺構が検出された。この付近の層位は，厚さ10～15㎝の表土の下がただちに地山となっており，溝状遺構はこの地山上で検出された。これらは，ほぼ丘陵に平行して造られている。

ＳＤ１は，ほぼ直線の南北溝で，南でＳＤ４に合流する。全長17,4ｍ，幅30～145㎝，深さ32～49㎝を測る。出土遺物はない。

ＳＤ２は，ＳＤ１の西にあるやや湾曲する南北溝である。全長26,8ｍ，幅40～115㎝，深さ15～22㎝を測る。出土遺物はない。

ＳＤ３は，ＳＤ２の西にある少し蛇行する南北溝で，一部分二股となっている。全長21.7ｍ幅60～85㎝，深さ９～14㎝を測る。出土遺物はない。

ＳＤ４は，ＳＤ１に南接する「く」状の南北溝で，南はさらに調査区外に続く。検出部分の

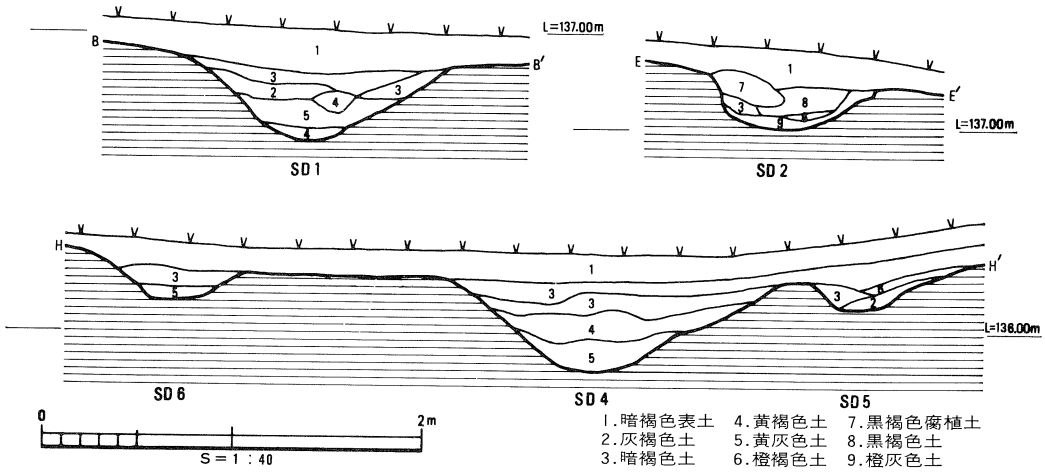


Fig.3　溝状遺構土層断面

長さ 13.0 m，幅 105 ～ 200 cm，深さ35～48cm。底から鉄滓 1 個が出土した。

ＳＤ５は，ＳＤ４に東接する南北溝で，南は調査区外に続く。検出部分の長さ 175 cm，幅60 cm，深さ17cm。出土遺物はない。

ＳＤ６は，ＳＤ４の西にある南北溝で，南は調査区外に続く。検出部分の長さ 450 cm，幅50～75cm，深さ20cm。出土遺物はない。

ＳＤ７は，ＳＤ１に東接する小南北溝である。南でＳＤ１に合流すると思われるが，その部分が削られている。現存部分の長さ 520 cm，幅50cm，深さ10cmを測る。出土遺物はない。

ＳＤ８は，ＳＤ７に北接する小南北溝である。全長 550 cm，幅35～50cm，深さ10cm。出土遺物はない。

以上の溝状遺構からの出土遺物は，鉄滓 1 個のみであり，遺構の時期は不明である。また，これらの遺構の性格も判然としない。

4. その他の遺構（PL. 2）

D区で土壙と柱穴を検出した。ＳＸ１は，２ｍ×１ｍ程の不定形の土壙である。深さ 2 cm。出土遺物はない。大半を削平された状態の何かの基底部であろうか。ＳＢ２の東と南で合計６箇所の柱穴を検出した。掘り方は円形で，径20～50cm，深さ９～59cmを測る。出土遺物はない。これらの柱穴は，建物としてまとまらない。

5. 遺　　物（Fig. 4・5，PL. 11）

遺物はＢ・Ｃ・Ｄの各区から出土した。主な遺物は，弥生土器，石斧，備前焼，銅銭，鉄滓であるが，全体として出土量は少なく，遺構に伴なう遺物もごくわずかである。

Fig. 4はＳＢ１出土の弥生土器である。１はピット１北の床面直上から出土した高杯形土器である。脚部下半を欠く。口縁部径 267 mm，脚部最少径55mm，杯部高さ75mmを測る。脚部は細く，杯部は大きく外反し，口縁端部が外方に拡張する。器壁は脚部で厚く杯部で薄い。杯部と脚部の接合は円盤貼り付けによる。脚部外面に横方向の沈線が施さ

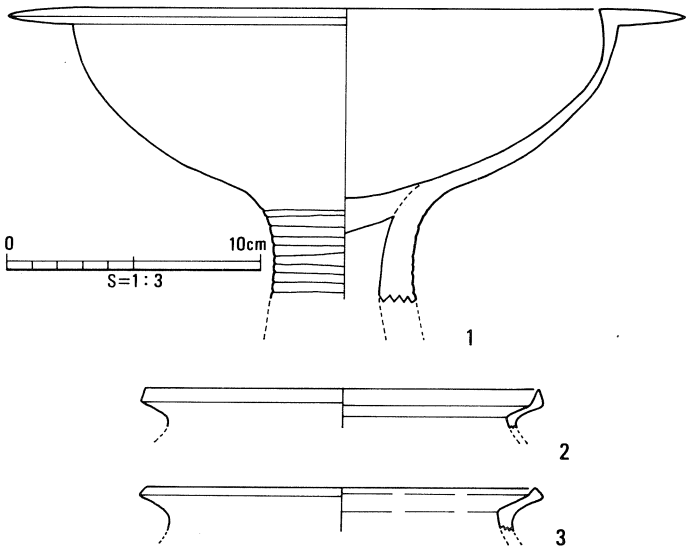


Fig.4　ＳＢＩ出土弥生土器

れている。器表内外面は剥離が著しく，調整痕跡は観察できない。色調は黄褐色を呈し，胎土には2㎜位の砂粒が少数含まれる。2・3はＳＢ１埋土出土の甕形土器の口縁部破片である。口径はどちらも160㎜位であろう。2は「く」字状口縁を呈し，その口縁端が上方に少し拡張する。器壁は薄い。外面は横なで，内面はヘラみがきが施されている。薄い褐色を呈し，胎土は細かい砂粒を多く含む。3も「く」字状口縁を呈し，口縁端が上方にわずかに拡張する。調整は内外面とも横なでである。2・3とも外面にススが付着している。以上の土器はいずれも弥生時代中期後半の特徴をそなえている。ＳＢ１からは他にも弥生土器の細片若干が出土している。

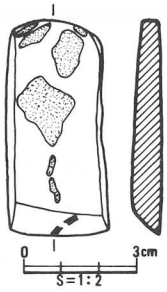


Fig.5
扁平片刃石斧

Fig. 5はＳＢ１付近の表土層から出土した扁平片刃石斧である。長さ57㎜，幅26㎜，厚さ8㎜を測る。片面はよく研磨されているが，他の面は刃部を除き研磨は入念でない。刃部に使用痕が認められる。石質は緑色片岩である。

PL．11－5はD区から出土した備前焼など中世以降の陶磁器片，PL．11－4はB区表土層出土の鉄滓である。また，PL．11－2はD－M3区出土の銅銭である。「寛永通宝」の 銘がある。1.8ｇ。

他にB区から鉄鎌1振，灯明皿1個，ＳＤ4底から鉄滓1個，C区から須恵器，備前焼，瓦質土器，鉄釘などが出土した。

Ⅳ　結　　語

野介代地京遺跡は，標高140ｍの南北丘陵とそこから東北に派生する支丘陵を中心に拡がっていると推定される。今回，発掘調査を行なったのは，その南よりの道路工事にかかる東西に細長い地区である。このように，調査を行なったのは遺跡のごく一部と思われ，また，調査により検出された遺構は，竪穴住居址１棟，掘立柱建物址１棟，溝状遺構８条などわずかである。従って，今回の調査によって遺跡の全体を推し量ることは困難である。ここでは，今回検出された遺構について若干の整理を行なうにとどめたい。

ＳＢ１は弥生時代中期後半の竪穴住居址である。１棟検出されたのみであるが，これは調査区の制約によるものであろう。恐らく主として北に拡がる集落跡の一部と判断されるのである。なお，Ｂ区丘陵頂が平担な地形となっており，人為的な削平を受けているものとするならばもとこの部分にも住居址などが存在したのかも知れない。

ＳＢ２は掘立柱建物址である。時期は明らかにしえなかった。しかし，Ｄ区出土の遺物が中・近世の時期のものに限られていることは，消極的ではあるが，ＳＢ２の時期も中・近世と推定することも可能である。ＳＢ２は桁行４間，梁間２間の総柱の建物址であるが，これと類似した建物は岡山県北に若干の調査例がある。すなわち，北房町谷尻（たにじり）遺跡５区No.９建物址は，桁行６間・梁間２間の総柱建物址である。この建物址はNo.８建物址と方位を同じくしており，その柱穴内より11世紀末葉の宋銭が出土していることから，No.９建物址も同様の時期と考えられる。[1] 勝央町平（たいら）遺跡東尾根部建物Ｉは，桁行３間，梁間２間の総柱建物址である。時期は中世と推定されている。[2] 津山市二宮遺跡岡の山Ｂ地区No.39建物址は，桁行３間，梁間２間の総柱の建物址である。時期は中世後期と推定されている。[3] これらはいずれも梁間２間で桁行３間以上の総柱建物で，時期はすべて中世に含まれる。しかし，以上の資料のみから，それらの建物址と時期も群構成も明確でないＳＢ２とを直接結びつけることは困難である。従って，ここでは単に建物構造の類似柱のみを指摘しておく。

溝状遺構は丘陵尾根に平行して大小８条検出された。遺物はＳＤ４から鉄滓１個が出土したのみである。これらの遺構については，時期，性格ともに明確にしがたい。

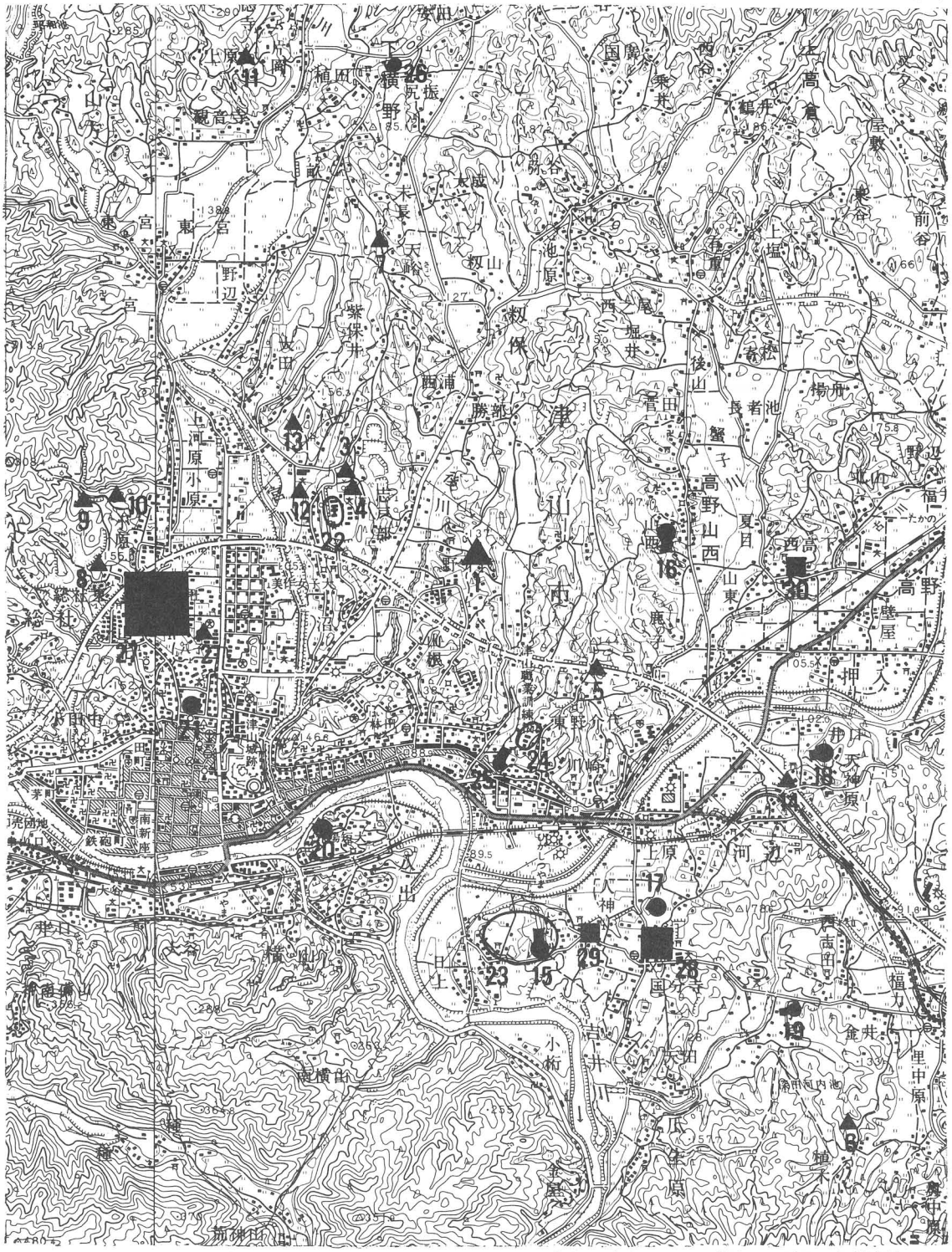
註

(1)　岡山県教育委員会「谷尻遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』1976），第55図

(2)　同　　上　「平遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８』1975），P. 140～143

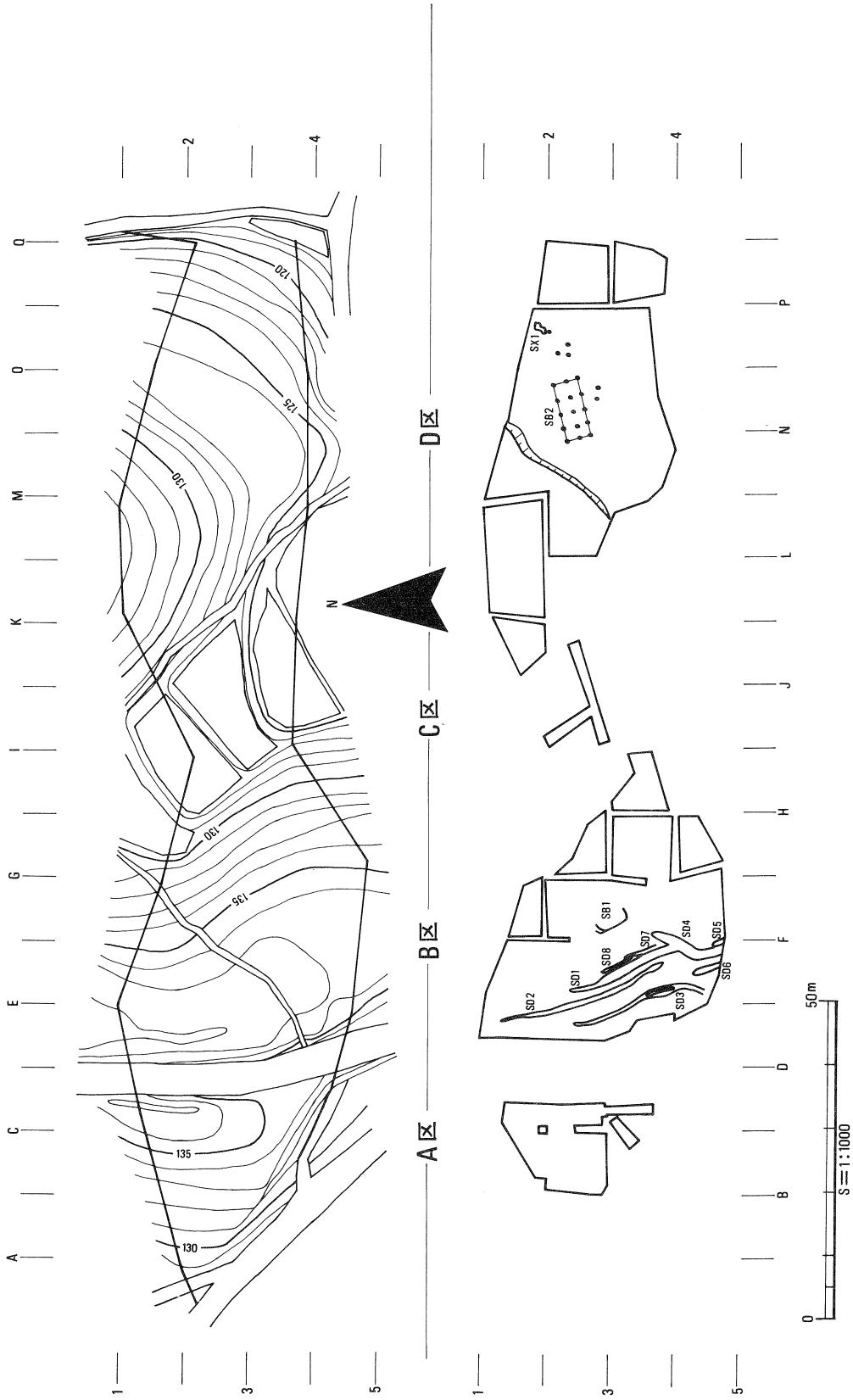
(3)　同　　上　「二宮遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』1978），P. 118～119

図　版

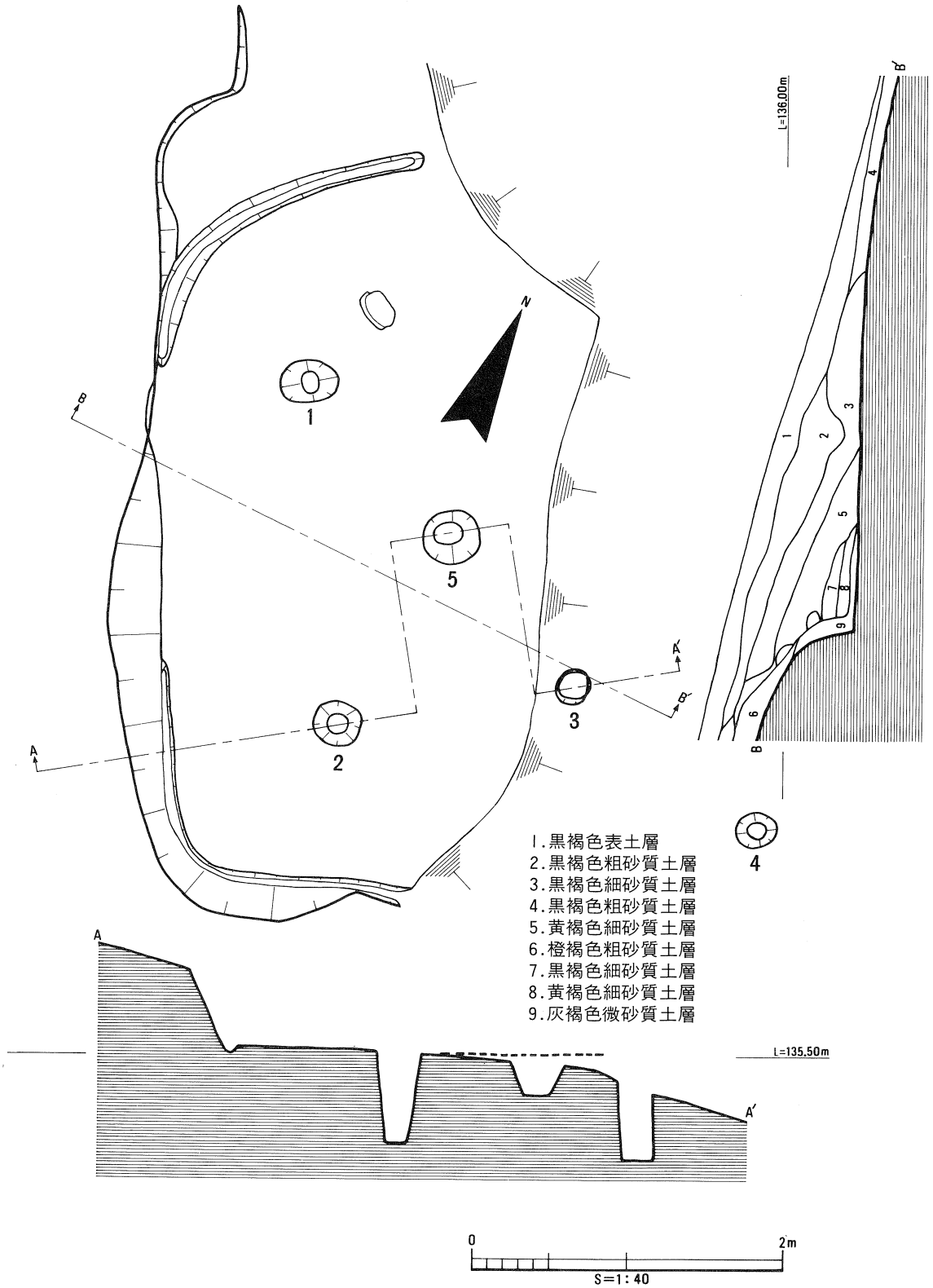


S＝1：50,000（国土地理院発行５万分の１地形図「津山東部」及び「津山西部」を複製）

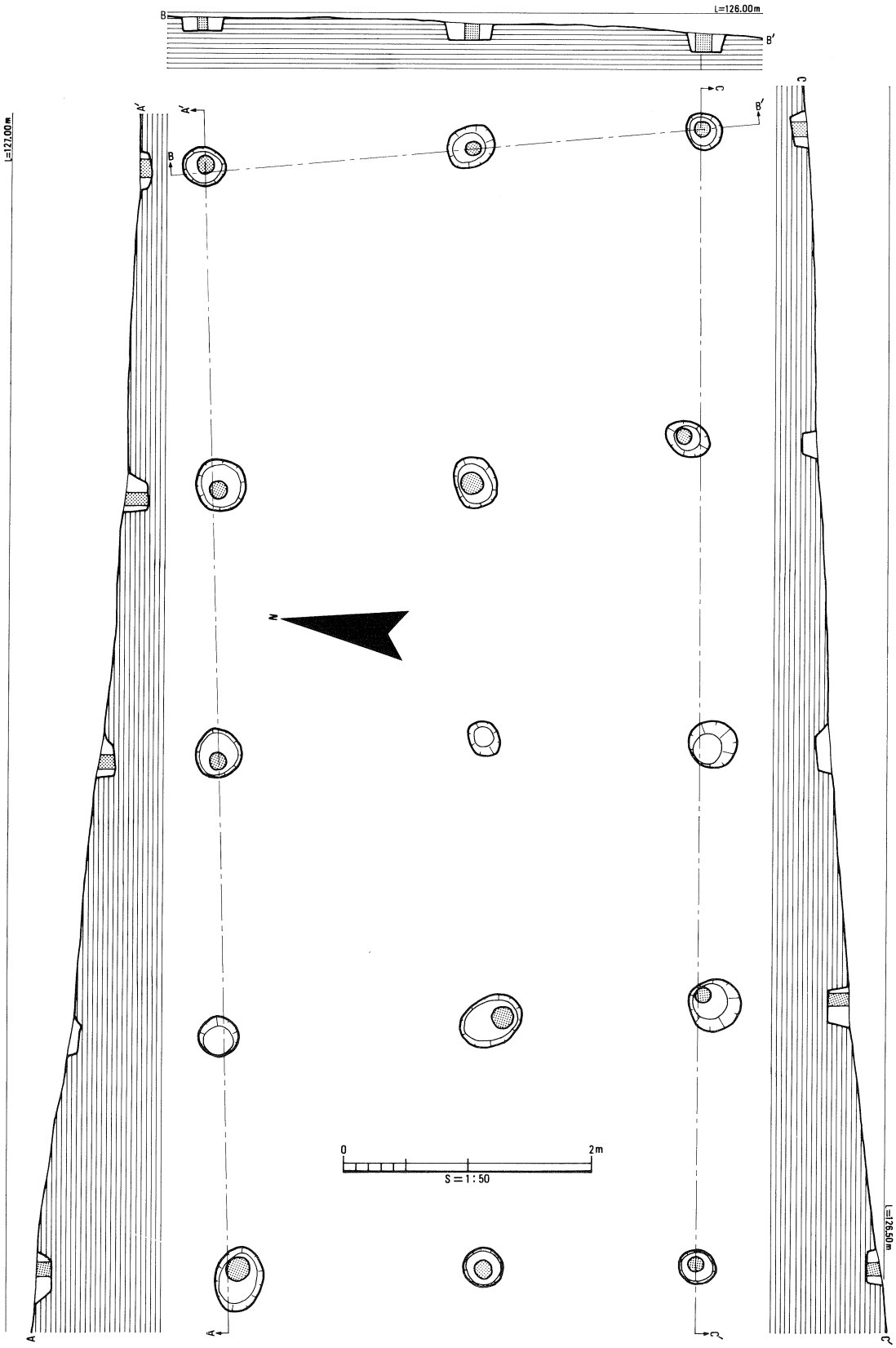
1．野介代地京遺跡
2．山北一丁田遺跡
3．沼弥生住居址群
4．沼Ｅ遺跡
5．押入西遺跡
6．金井別所遺跡
7．紫保井遺跡
8．総社内山遺跡
9．下道山遺跡
10．権現山遺跡
11．上原遺跡
12．沼京免遺跡
13．大田十二社遺跡
14．天神原遺跡
15．日上天王山古墳
16．正仙塚古墳
17．国分寺飯塚古墳
18．井口車塚古墳
19．瓜生原小原古墳
20．八出覗山遺跡
21．十六夜山古墳
22．沼古墳群
23．日上畝山古墳群
24．川崎六ツ塚古墳群
25．玉琳大塚古墳
26．大野木塚古墳
27．美作国府跡
28．美作国分寺跡
29．美作国分尼寺跡
30．夜半廃寺


A区
B区
C区
D区
N
SX1
SB2
SB1
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
120
125
130
135
50m
S=1:1000

竪穴住居址（SB1）

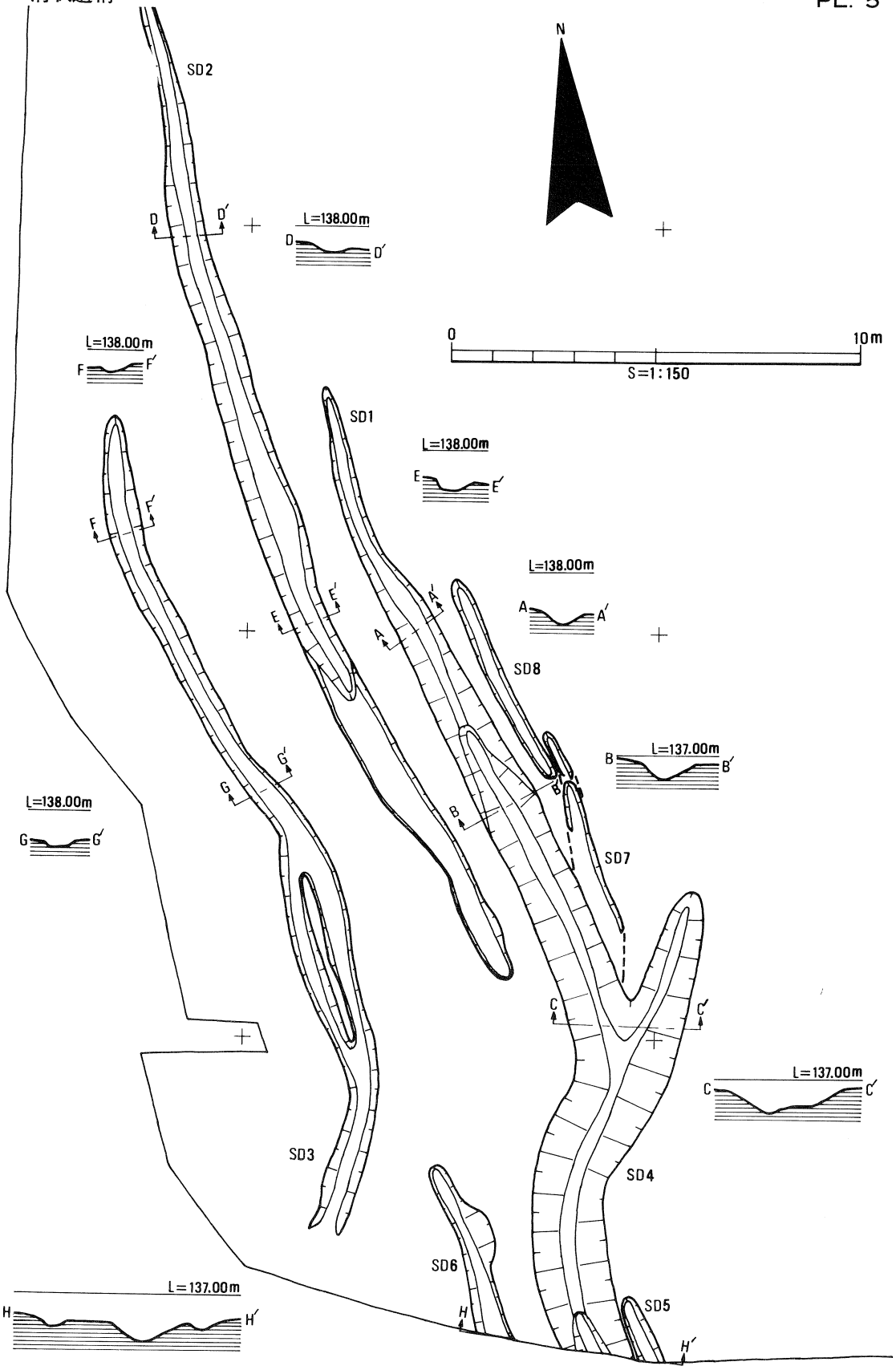

N
1
2
3
4
5
A
A′
B
B′
L=136.00m
L=135.50m
1.黒褐色表土層
2.黒褐色粗砂質土層
3.黒褐色細砂質土層
4.黒褐色粗砂質土層
5.黄褐色細砂質土層
6.橙褐色粗砂質土層
7.黒褐色細砂質土層
8.黄褐色細砂質土層
9.灰褐色微砂質土層
0
2m
S=1:40

建物址（SB2）

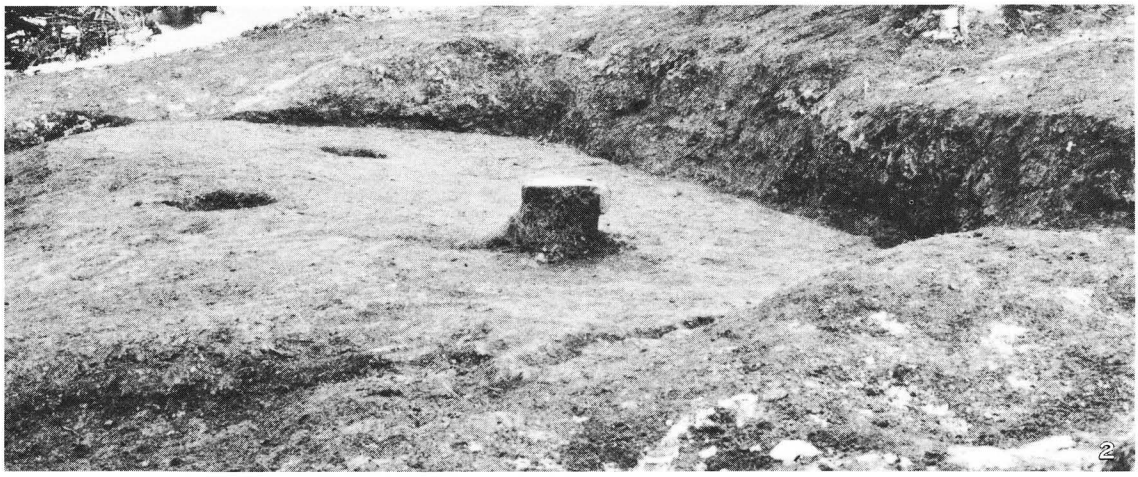


溝状遺構

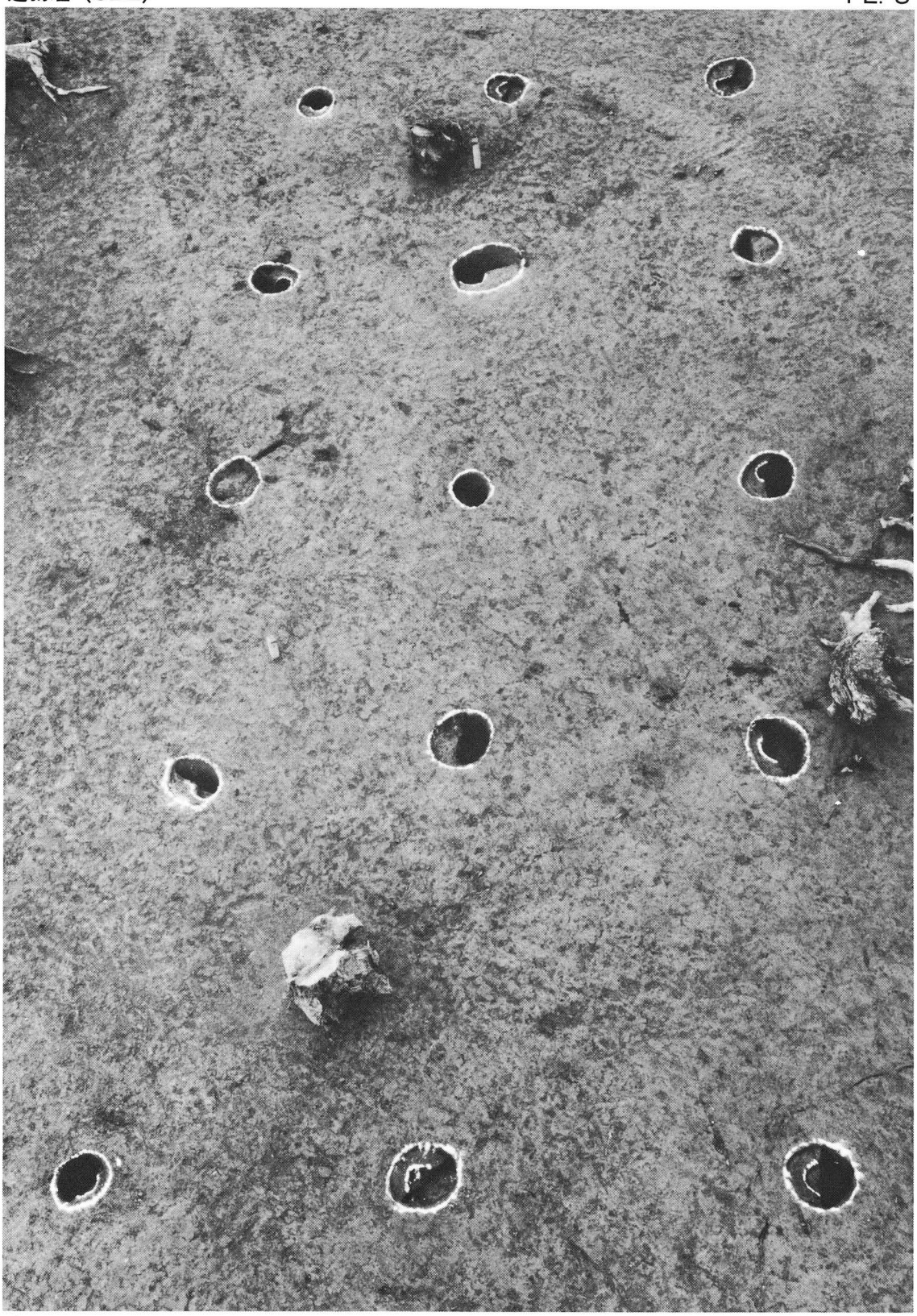
PL. 5


N
0
10m
S=1:150
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
L=138.00m
L=137.00m
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′

1. A区・B区（西から）**2.** D区（東から）

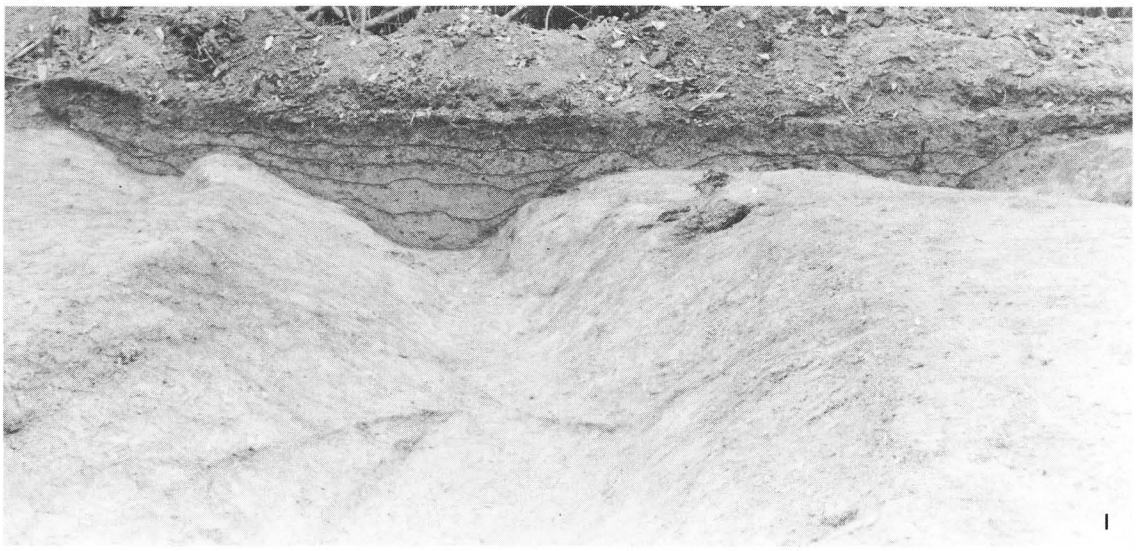


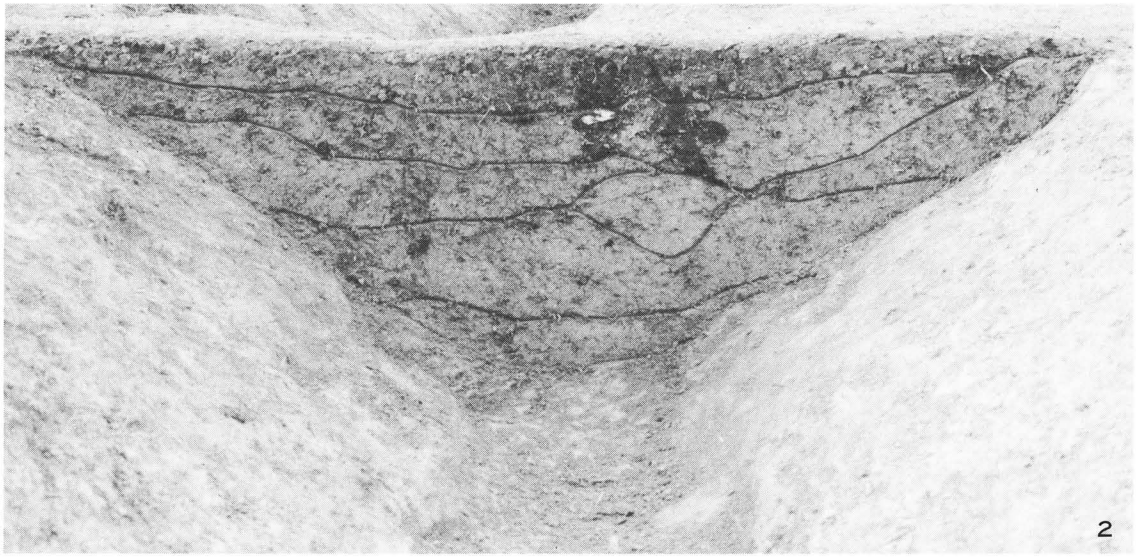
1.東南から　**2.**北から　**3.**断面Ｂ－Ｂ′

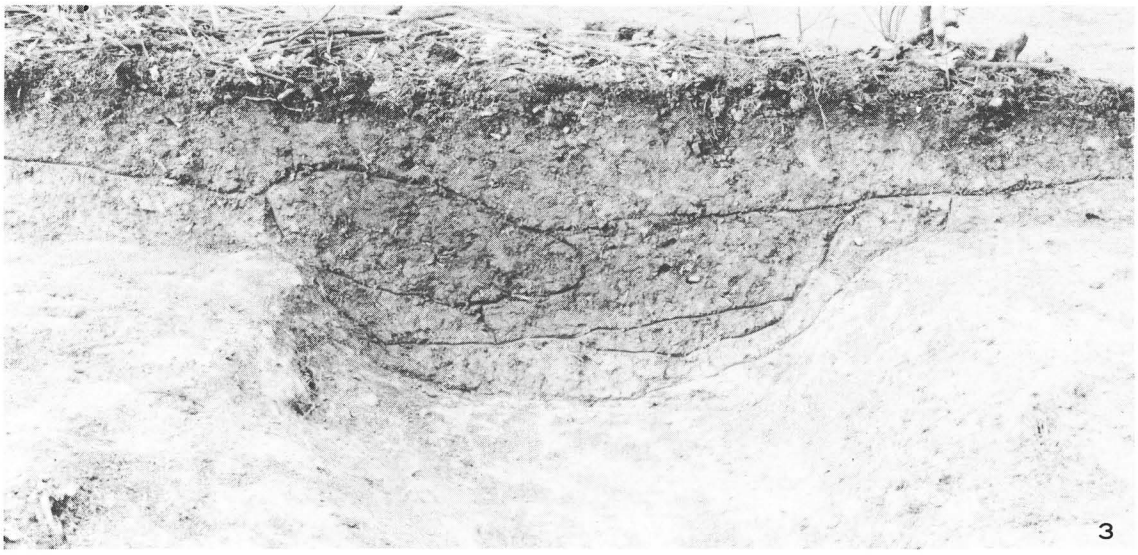


東から

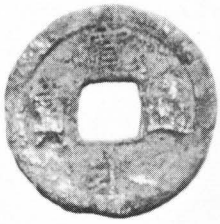
1. ＳＤ１～４，ＳＤ７・８(南から)　**2.** ＳＤ２・３(南から)

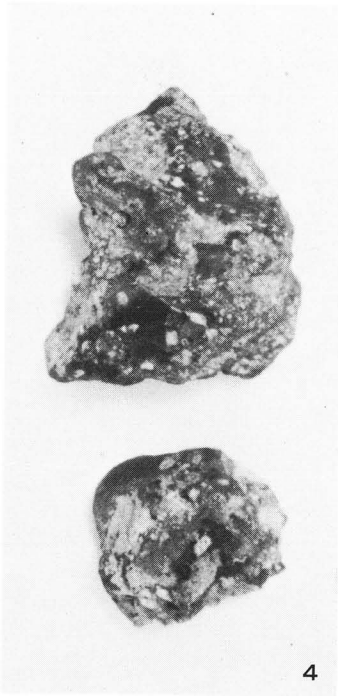


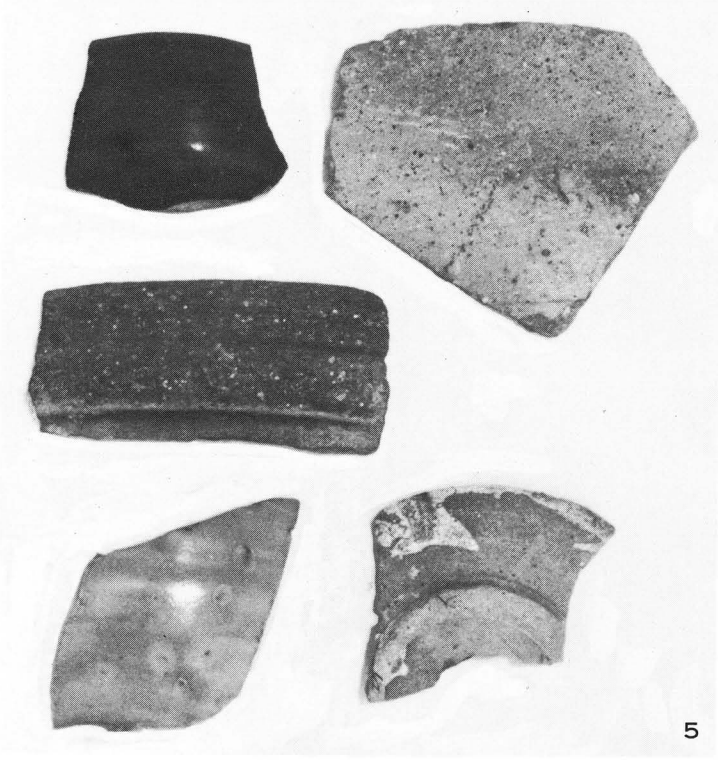




1. ＳＤ４～６(断面Ｈ－Ｈ′.北から) **2.** ＳＤ１(断面Ｂ－Ｂ′.南から) **3.** ＳＤ２(断面Ｅ－Ｅ′.南から)







1.高杯形土器 2.銅銭 3.扁平片刃石斧 4.鉄滓 5.D区出土陶磁器

野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4集

1977年3月31日発行

発行　津山市教育委員会
道路改良工事新錦橋押入線
文化財発掘調査委員会
岡山県津山市山下97番地の1

印刷　美作印刷工業株式会社
岡山県津山市二階町57